



Title	若き日のトルストイと日本 : 一枚の日本地図について
Author(s)	森光, 広治
Citation	大阪大学言語文化学. 2008, 17, p. 59-59
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77846">https://hdl.handle.net/11094/77846</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 若き日のトルストイと日本

—一枚の日本地図について—\*

森光 広治\*\*

キーワード：日本地図 クルゼンシュテルンの世界一周 フョードル・トルストイ

Широко известно, что в последние годы своей жизни Лев Толстой усиленно занимался восточной культурой. Он по-своему воспринимал Конфуция и Лао-цзы, и это отразилось в его религиозном мировоззрении. Также известно, что некоторые японцы посещали Толстого в Москве, в Ясной Поляне. В письмах и дневниках Толстой неоднократно упоминает о Японии. Из дальневосточных стран Толстой придавал большое значение Японии. Пиком его интереса стали годы русско-японской войны.

О связи молодого Толстого с Японией известно очень немного. У молодого Толстого Япония упоминается не слишком часто: осталось всего лишь несколько записей и одна карта Японии, нарисованная собственной рукой великого русского писателя. Сведения, представленные на карте Толстого, японцам хорошо известны, но в начале 19-го века для иностранцев информация о Японии была ограничена, а для картографов северная часть Японии была неизвестной зоной.

И в это время выдающиеся мореплаватели из разных стран пытались найти удобные морские пути, изучить северную часть Японии. Броутон, Ла Перуз, и Крузенштерн открыли новую эпоху в истории картографии.

Для нас важно, что Крузенштерн находился в непосредственной близости от Японии. На его корабле «Навежда» был один родственник Толстого. Это Фёдор Иванович Толстой. Хотя он не доехал до Японии, его связь с Японией очевидна.

Лев Толстой был очень близок к семье Фёдора Ивановича. Он много времени проводил у его жены, был в дружеских отношениях с мужем дочери Фёдора. Однако о Фёдоре Толстом, так же как и о карте, нарисованной рукой писателя, редко упоминается в исследовательских работах.

Итак, в нашем распоряжении было всего несколько записей и одна карта, и мы старались пролить новый свет на эти материалы. Это позволило нам заметить связь этих

---

\* Молодой Толстой и Япония (Заметки по поводу одной карты) Моримицу Кодзи (MORIMITSU Koji)

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

материалов с другими более значительными событиями из жизни великого русского писателя.

## 1 トルストイによる手書きの日本地図

トルストイは晩年に近づくにつれて、日本を含めた東洋との関係を深めていった。小西増太郎（1862 - 1940）がモスクワに、徳富蘆花（1868 - 1927）がヤースナヤ・パリャーナに直接トルストイを訪ねたことに関しては、よく知られている。また晩年のトルストイは様々な形で日本についてしばしば言及している。これらの事実はトルストイの世界観の中に日本が入っていたことをはっきりと示している。

それに対して若き日の、1850年代のトルストイと日本との関係に関しては、日本側、ロシア側、双方の研究史において全く言及されていない。1853年のトルストイの日記の中にある日本地図<sup>1)</sup>については黙殺されているに等しい。言い換えると1850年代初頭におけるトルストイと日本は無関係だとして扱われて来た。確かに日本に関する記事は日記全体からみればほんの僅かなものである。トルストイが気まぐれに、何とはなしに日記に記しただけのように見え、何の意味も持たないように見える。

90巻全集の注釈によれば、日記の中にある日本関連の記事は、全てゴロヴニン（1776 - 1831）の『日本虜囚記』からによるものという<sup>2)</sup>。しかしゴロヴニンの『日本虜囚記』には日本地図は記載されていない。地図に関して全集の注釈者は沈黙している。

本論で問題とする日本地図はトルストイの手書きによるものであり、何か手本となるものを見ながら書いたものである。つまりトルストイの空想によって書かれたものではなく、確かな規範がすぐそばにあった。この日本地図は一応日本の形をなしている。これは手書き日本地図の、空想では書けない正確さを示しているのである。

1853年にトルストイはこの日本地図をカフカスのスタラグラトコーフスカヤ村で書いた。だから日本地図は1853年以前の出版でなければならない。トルストイはどの地図を参照したかについては記していない。果たしてどのような地図がトルストイの手元にあったと考えられるだろうか。調査の結果、トルストイと日本地図を直接結びつける資料は見つからなかった。以下は地図製作史とロシア文学史を手がかりにした推論である。

<sup>1)</sup> トルストイ 90巻全集、モスクワ、1934年、第46巻、pp.283。以下トルストイに関しては（46, 283）という形で巻数と頁数のみを記す。

<sup>2)</sup> Василий Михайлович Головнин, «Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 12 и 13 годах», СПб., 1816. 江戸の人口や、日本の時計についての記事が抜き書きされている。

## 2 地図の歴史における日本北方図

### 2. 1 北海道を中心として

1853年以前における日本地図、またはそれを含めた世界地図を考えた場合、候補はすぐさまいくつかにしぼられる。19世紀以前は、日本という国の存在はヨーロッパに知られてはいたが、日本地図に関しては未知な部分が多かった。ましてや正確な地図は存在していなかった。このことは北海道に注目するとはっきりするのである。19世紀に入るまでの測量では主に北海道や樺太が未知なる地域として残されていた。アラゴ(1790 - 1855)<sup>3)</sup>、クック(1728 - 1779)の地図においては北海道が形をなしておらず、プロトン(1762 - 1821)やラ・ペルーズ(1741 - 1788)<sup>4)</sup>による地図においても北海道は部分的に捉えられたにとどまり、日本は不正確に表示されている。

一方19世紀初頭、通商関係を求めるロシア側の動きに刺激されて、日本でも北海道や千島列島、樺太の調査が活発になる。そしてこの時期の地図製作者と言えば、伊能忠敬の名前を挙げる必要がある。1800年に南蝦夷地の測量を始め、ロシア側の北太平洋図に遅れること12年、1821年に大日本沿海実測全図が上程された<sup>5)</sup>。当時最も正確な日本地図であった大日本沿海実測全図であるが、これが直接カフカスにいるトルストイの手に渡ったと考えることは不可能である。地図は国家機密であり、海外に持ち出されることは原則的に禁じられていた。

しかしこれを模写し、国禁を犯して海外に持ち出した人物がいる。これがシーボルトであり、シーボルト事件として歴史的に記憶されている<sup>6)</sup>。シーボルトは模写した伊能忠敬の地図やその他の資料をもとに日本地図を最初に1840年に、後に1851年にオランダで出

<sup>3)</sup> Jacques Etienne Victor Arago、フランスの劇作家にして旅行家。トルストイは1853年の11月5日から15日あたりにかけてアラゴの著作(Путешествие вокруг света. Воспоминание слепого. СПб. 1844-1845.)を読んでおり、批判的な感想を残している(46, 197)。なお、アラゴの世界地図の中の日本地図は、北海道が北海道の形をしていない。

<sup>4)</sup> Jean Francois Galaup De La Perouze、フランスの海軍士官、ルイ16世の命を受けて1785年から1788にかけて年海洋調査に従事する。ヨーロッパ人として初めて宗谷海峡を通過した。その航海記と調査記録は1797年革命政府によって出版された。ラ・ペルーズは北海道周辺地域を「近代の航海者が後継者にその解釈を残した最重要な地理上のこの地点」としている。「ラペルーズ世界周航記 日本近海編」小林忠雄編訳、白水社、1988、129頁。

<sup>5)</sup> この地図の作成が伊能忠敬一人によるものでないことは明らかである。彼の周りにはたくさん協力者があった。主な人々の名前を挙げると、師である高橋至時(よしとき、1764 - 1804)、理論家の間重富(1756 - 1816)、幕府当局との交渉にあたった高橋景保(かげやす、1785 - 1829)、渋川景佑(かげすけ、1787 - 1856)など。また伊能測量隊の隊員たちの献身的な協力もあり、大規模で困難な集団作業であった地図作製が成功した。また蝦夷地、樺太調査においては間宮林蔵、最上徳内の功績があった。

<sup>6)</sup> シーボルトが1828年日本からの帰国に際して、地図その他の輸出厳禁の品々を所持していたことが当局に発覚した。詳しくは「シーボルト先生、其生涯及功業」一巻、平凡社、1967を参考のこと。本論との関わりで言えば、シーボルトは高橋作左衛門と書籍の交換をしており、その中にクルゼンシュテルンの「世界周航記」があった。またシーボルトはロシアと縁が深く、日本から持ち出した地図の正確さを問うために、クルゼンシュテルンに意見を参考にしており、極めて細い線ではあるが、伊能忠敬の地図はロシア側にも渡っていたのである。

版している<sup>7)</sup>。

このシーボルト地図が直接トルストイに渡ったとは考えられない。これを裏付ける資料はトルストイの近辺には見当たらない。シーボルト地図が一般には普及していなかったことは、1862年製のイギリスで発行された日本地図が、シーボルト地図を参考にしていないことから推測される<sup>8)</sup>。このイギリス製日本地図は、表題にロシアのクルゼンシュテルン(1770 - 1846)の海図を参考とした、とあるように、主にクルゼンシュテルンの日本地図に従っている。このことは、クルゼンシュテルンが北太平洋地図に関して名声が高かったことで説明される。

本論にとって、地理的、時間的条件を考慮すると最も重要なものはクルゼンシュテルンによる日本地図(北太平洋図)であろう。1803年から1806年にかけて、クルゼンシュテルンを中心としたナデージュダ号、ネヴァ号の両船舶は世界一周の調査旅行を行う。日本へは1804年に長崎へ寄港する。クルゼンシュテルンが日本に寄港した理由の一つに大使レザノフを送り届けることがある。歴史的には、クルゼンシュテルンの調査よりも、大使レザノフが日本に通商上の関係を求めた事件として知られている。

ナデージュダ号を操ってクルゼンシュテルンは1805年に北海道や千島列島を含めた日本の西側の調査をする。世界一周の調査旅行であったが、日本の調査が占める比重は大きい。地図の作製のみならず、風土、動植物と魚類のスケッチ、人々の様子など、航海記の2~3割が日本に割かれている。そして測量された日本地図は、当時としては正確なものであり、1809年に出版され、諸外国語に翻訳されている<sup>9)</sup>。そしてその地図は、その後のヨーロッパにおける日本地図作製の礎となった<sup>10)</sup>。

### 3 クルゼンシュテルンとレフ・トルストイをつなぐ人物

伊能—シーボルト地図と、クルゼンシュテルン地図と、いずれをトルストイは目にしたのであろうか。ここにレフ・トルストイとクルゼンシュテルンをしっかりとつなぐ人

<sup>7)</sup> 1840年の地図には日本の北方は含まれていない。北方の地図を含めて日本地図を出版したのは1851年である。1851年といえば、すでにトルストイはカフカスに赴任しており、当時の出版事情を鑑みると1853年までにトルストイがシーボルトの地図を見た可能性は低いと言わざるを得ない。

<sup>8)</sup> 「伊能忠敬の科学的業績」、保柳睦美編、古今書院、1974、pp.210。

<sup>9)</sup> イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、イタリア、スウェーデン、デンマーク、で翻訳出版されている。著書はロシア内外で高く評価された。クルゼンシュテルンはイギリス、フランス、デンマーク、ドイツでアカデミーや科学協会の会員に選ばれている。В. М. Пасецкий, «Иван Фёдорович Крузенштерн», Москва, 1974. С.81。

<sup>10)</sup> シーボルトは水路学者、海洋学者としてのクルゼンシュテルンの仕事を極めて高く評価している。「今世紀に日本国の領域のなかでなされた諸発見が、ロシアから生まれたことはすでに示されたところである。しかしロシア側からなされたことはそれ以上のものがある。・・・<中略>・・・クルゼンシュテルンのような人物は、まさに世界の海のこの部分における水路測量学を決定的に転換させた創造者である。それを知るためには、彼の「太平洋地図」Atlas de l'Océan Pacifiqueとそれに関する彼の『太平洋水路測量記録集』を挙げるだけで十分であろう。」フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、「日本」、中井晶夫訳、雄松堂書店、1977、第一巻、pp.114。

物がいる。それがフョードル・イヴァーノヴィッチ・トルストイである。レフのおじにあたるフョードル・トルストイは、「アメリカ人」という綽名で知られる、大変有名な伝説的人物である。また有名な人物でありながら、従来の研究では触れられることの少ない不思議な人物である。

フョードル・イヴァーノヴィッチ・トルストイ（1782 - 1846）は海軍士官学校を出てプレオブラジェンスキー連隊に勤務、1803年から始まるクルゼンシュテルンの世界一周調査船に乗り込む。彼がクルゼンシュテルン率いるナデージュダ号に乗船していたことははっきりしている。しかし、ここから彼がペテルブルグへ戻るまでの間の足取りがはっきりしない。

公式の説はこうである。日本行きを控えたペトロパーヴロフスクにて、大使付き侍従団の構成員の変更があった。フョードル・トルストイ、医者プリンキン、画家クルリヤンツォフが船を後にし、陸路サンクト・ペテルブルグへと向かった<sup>11)</sup>。

しかしこの説だとフョードル・トルストイがアメリカ人と綽名される理由が分からない。諸説あるのだが<sup>12)</sup>、それらをセルゲイ・トルストイがまとめて次のように述べている。

私は次のような仮説を立てる。フョードル・トルストイのいたずらの後（おそらく猿にクルゼンシュテルンの日誌を汚させた）、クルゼンシュテルンは彼のことを処分するために、ナデージュダ号からネヴァ号へ彼を移し、リシャンスキーにロシア・アメリカ領で彼を船から降ろすように頼んだのではなかろうか？というのもネヴァ号はハワイ諸島でナデージュダ号と別れた後、真っ直ぐにロシア・アメリカ領へと向かったからである<sup>13)</sup>。

セルゲイ・トルストイ説を取れば、フョードルが日本へ行ったとは考えられない。それ故フョードルは日本には寄港していない。

いずれにしても日本にやって来た可能性は低い。だからといって日本とつながりが無いとは言えない。何故ならナデージュダ号には数人の日本人漂流民が乗船していた。こ

<sup>11)</sup> И.Ф. Крузенштерн, «Путешествие вокруг света в 1803, 4, 5, и 1806 годах. По повелению его императорского величества Александра Первого». Часть первая, СПб., 1809. С., 258.

<sup>12)</sup> トルストイ 90 巻全集の注解によれば、「彼は若い頃に世界一周の航海に出たのだが、自らの行為のせいで下船させられた。アリューシャン列島に滞在し、その後カムチャッカ、そこからシベリア経由でペテルブルグへ帰還した。・・・中略・・・トルストイの作品の中では、『二人の軽騎兵』、『戦争と平和』のドーロホフにフョードルが反映されている」（46,488）。アリューシャン列島は当時ロシア・アメリカ領（1867年にアメリカに720万ドルでアラスカとともに売却）であったので、「アメリカ人」という綽名がついたと考えられている。しかしはっきりとした根拠はない。

<sup>13)</sup> С.Л. Толстой, «Фёдор Толстой Американец», Москва, 1926. С., 23.

れについては大槻玄沢らが当事者らに取材して、『環海異聞』にまとめている<sup>14)</sup>。

フョードル・トルストイがナデージュダ号において津太夫らと接触を持った可能性は十分考えられる。少なくとも同じ船の上で、フョードルが津太夫らを目にしていなかったとはあり得ない。そしてフョードルが近い人々にこれらの出来事を語ったことはごく自然に想像できる。レフ・トルストイは、フョードルとも面識があったが、その家族とも交流があった。したがってレフ・トルストイが何らかの形でフョードルの体験を耳にしていた、と十分に考えられる<sup>15)</sup>。

#### 4 フョードル・トルストイと19世紀ロシア文学

フョードル・トルストイは19世紀初頭に活躍した代表的な作家・詩人とたちのほとんどと交流があった。グリボエドフは『知恵の悲しみ』<sup>16)</sup>にフョードルを模した人物を書き、プーシキンは彼について詩の中で語り<sup>17)</sup>、ヴァーゼムスキーとは親密な関係にあり<sup>18)</sup>、ゲルツェンは『過去と思索』の中で幾度かに渡り彼を回想している<sup>19)</sup>。またプーシキンに関して言えば、フョードルとプーシキンは決闘騒ぎまで起こしており、その後和解し、一度はフョードルがプーシキンの仲人まで努めている。フョードル・トルストイ自身は文学者ではなかったが、彼自身が時代を表す指標的存在であったと言える。

レフ・トルストイ自身が『二人の軽騎兵』(1856)においてフョードル・トルストイを描いている。『二人の軽騎兵』は、トゥルビン親子二世代についての物語である。父のフョードル・トゥルビンは、19世紀初頭、プーシキンの時代を生きている。親がプーシキンの時代であるならば、子のトゥルビンは、レフ・トルストイの時代であり、この点で「父と子」という主題によっても読むことができる。しかしトゥルゲネフの『父と子』に見られるような父と子の直接的対立はない。『二人の軽騎兵』は、トルストイの作品の中でも言及されることが極めて少ない作品である。これまで思想的にも美学

<sup>14)</sup> 仙台出身の津太夫、儀平、左平、太郎の4人。『環海異聞 本文と研究』大槻玄沢、志村弘強編、杉本つとむ他解説、八坂書房、1986、pp.32またはpp.384。415から416頁にかけて長崎におけるロシア側の主な乗組員の名前が挙げられているが、そこにフョードルの名前はない。

<sup>15)</sup> カフカス時代のトルストイの手紙にフョードルの妻 Евдокия Максимовна の名前が見られ、またレフと仲の良かった В.С. Перфильев はフョードルの娘 Прасковья Фёдоровна と結婚しており、カフカスに赴任する直前まで彼らにモスクワで会っている(46,40-45)。

<sup>16)</sup> 第4幕第4場、レベチーロフの独白、“Ночной разбойник, дуелист. / В Камчатку сослан был, вернулся алеутом, / И крепко на руку нечист,” Д.И. Фонвизин, А.С. Грибоедов, Пьесы, Москва, 2001. С., 247.

<sup>17)</sup> 1820年のエビグラム、“В жизни мрачной и презренной . . .” また1821年のチャーダーエフに宛てた詩の中の一節、“Или философа, который в прежни лета / Развратом изумил четыре части света” においてフョードルに言及している。

<sup>18)</sup> ヴァーゼムスキーには「トルストイに」という詩がある。П.А. Вяземский, сочинения в двух томах. Москва, 1982. С., 88.

<sup>19)</sup> А.И. Герцен, «Былое и думы», Москва, 1983, том 1, с., 250-251, том 2, с., 134.

的にも論じられることが少ない—つまり芸術的完成度が低い作品として考えられて来た。今仮に初期作品群を『幼年時代』(1852)から『コサック』(1861)までジャンル別に概観した時、『幼年時代』に始まる三部作と『地主の朝』(1856)、『コサック』を自伝的作品群とし、『侵入』(1853)に始まる一連のカフカスものとセヴァストーポリ三部作を軍隊小説群とし、『吹雪』(1856)、『リュツェルン』(1857)、『アルベルト』(1858)などを、作家がカフカスからペテルブルグに移り、美学論争に巻き込まれて行った時代の作品群とする。この時『二人の軽騎兵』はいずれのジャンルにも分類しにくい。他の作品に見られるような目立った特徴がないからである。

ただし本論にとって『二人の軽騎兵』は、作家レフ・トルストイとフョードル・トルストイ、さらにはクルゼンシュテルンへと関係を繋げる重要な作品である。トルストイは後に回想録の中でフョードルに触れ、「魅力的な人物であり、もっと彼の事を書きたい」と述べている。「彼の事をもっと描く」という言葉はフョードルの世界一周航海も含んでいたと十分に考えられる。

上に考察したように、トルストイはおじのフョードルをよく知っていた。子どもの頃直接会っているし、親族とはよく行き来があった。フョードルがクルゼンシュテルンの世界一周調査旅行に同乗したことは、近しい人々から聞かされたことであろう。『二人の軽騎兵』ではおじのフョードルを指標として自分の属する時代を考えている。

このようにクルゼンシュテルンとフョードル・トルストイ、レフ・トルストイは関係付けられる。だがクルゼンシュテルンからトルストイの手書きの日本地図へはまだ遠い。

以下に手書きの日本地図を分析する。

## 5 地図の分析

18世紀から19世紀半ばまでの西洋におけるアジア地図を概観した時<sup>20)</sup>、クルゼンシュテルンの地図を除けば、1840年代以降より各国の諸地図における北海道の形が格段に良くなってゆく<sup>21)</sup>。北海道に限れば、時期的にみてトルストイはクルゼンシュテルンの日本地図を参考にしつつ日本地図を書いた可能性が高いと思われる。しかしそう断定するためにはいくつかの疑問に答えなければならない。一つは経線・緯線の問題である。

<sup>20)</sup> 図書館で閲覧することができた地図以外はウェブ上で確認した。『蘆田文庫特別展』<http://www.lib.meiji.ac.jp/ashida/display/exhibit-2004/index.html>、

『西洋古版アジア図』<http://www.library.osaka-u.ac.jp/tenji/maps/maps.htm>、“Alabama map”<http://alabamamaps.ua.edu/historicalmaps/asia/index.html>を参考にした。

<sup>21)</sup> 前掲の“Alabama map, historical maps,”における“Asia, continent, 1840-1861”を参考にした。

トルストイによる日本地図では、北海道（トルストイの地図ではエソ、マツマイとなっている）の真ん中あたりを  $160^\circ$  の経線が通っている。また、18世紀末から19世紀初頭にかけて、メルカトル図法が主流となってくるのであるが、トルストイの地図は明らかにメルカトル図法ではない。ラペルーズ、ブロートン、クルゼンシュテルンなどの地図ではメルカトル図法が採用され、経度・緯度は今日のそれに極めて近づいている。

北海道を  $160^\circ$  の経線が通るのは古い地図である。18世紀から19世紀初頭にかけて、北海道のあたりを  $160^\circ$  の経線が通る地図は複数存在する。その中でも注目すべきは、ロシアのシベリア・太平洋北部地図が伝統的に北海道 =  $160^\circ$  を採用している事である。

北海道のあたりを  $160^\circ$  の経線が通るということは、本初子午線（度数を計る基準の子午線）は、アフリカの西、カナリア諸島のあたりを通ることになる。この基準は古くは古代ギリシャでもプトレマイオスによって使用されていた。ロシアではアカデミー版の公式地図は本初子午線 = カナリア諸島を採用している。またシベリア—西アメリカ地図でも同じ基準が使用されている。それ故トルストイは日本地図を書く時に、古いタイプのシベリア・北太平洋地図、あるいはアジア地図を参考にしていたのではないかと考えられる。

もう一つの問題は、トルストイの地図における「日本海」、「朝鮮海峡」（対馬海峡）、「樺太—サハリン」という呼称である。18世紀から19世紀半ばまでのアジア地図、シベリア極東地図を調査した結果、「日本海」という呼称が定着するのは、ラペルーズ以降である。それ以前は“sea of Corea”, “sea of Korea”, まれに「オリエンタル海」、「カムチャッカ海」と書かれている。

つまり本格的な日本沿岸、北海道、樺太、千島列島の測量が進むにつれて「日本海」という呼称が定着する。クルゼンシュテルンによってこの呼称はヨーロッパ地理学、水路学に定着した。これは一般にもよく知られている。

「朝鮮海峡」という呼称もまた18世紀の地図ではほとんど見かけない。初見が1800年の地図である。その後19世紀に入って定着したかのように見えるが、地図によっては何も呼称を使用していないものが多々ある。

これらを鑑みて言えるのは、経線・緯線に関しては、トルストイは古い地図を参考にしている。しかし北海道の形、「日本海」、「朝鮮海峡」という呼称は19世紀以降、両者が併用されるのはクルゼンシュテルン以降のものである。つまりトルストイは少なくとも新旧2種類以上の地図を参考にしており、古い方（おそらくロシア・アカデミーのシベリア・極東地図）かまたは両方が世界地図 = アトラスであったことがほぼ確実である<sup>22)</sup>。古い形式と新しい内容が混在しているのである。いずれにしても北海

道の形、「日本海」、「朝鮮海峡」の呼称に関しては、クルゼンシュテルンに依ったか、あるいはクルゼンシュテルンの地図に基づいた地図を参考としている可能性が高い。唯一の例外は、当時の日本地図としては異色の山田聯による「地球輿地全図」<sup>23)</sup>（文化7年／1810年）である。この地図はロシア、中国、日本の情報を総合して作られ、円錐図法を用い、北海道＝160°を採用し（ロシアの地図の影響と思われる）、「日本海」の表記がある（「朝鮮海峡」は無い。またサハリンが2島に分かれている。このためトルストイの地図とは関係がないと思われる。）

1840年から1850年にかけての海外の古地図の中で、①北海道がおよそ北海道らしい形をし、②「日本海」と「朝鮮海峡」の呼称を使用しているものは、Boyton (1841)、Arrowsmith (1842)、Woodbridge (1845)、Thomas (1846)、Mitchell (1846)、Vuillemin (1850)（いずれも“Alabama map”による）などがある。このうち1850年にパリで出版されたVuilleminの地図が最もトルストイによる地図に近い。それは③サハリンの呼称とともに樺太の文字が並記されているからである。しかしシーボルトの地図を含めて、これら1840年代以降のヨーロッパで作成された地図が、カフカスで生活しているトルストイの手元にあったとは考えにくい。またシーボルトを除いて、クルゼンシュテルンの日本地図から上記の諸地図が進化しているとも言い難い。中には明らかに退化している地図もある。そもそも海外の諸地図はシベリア、ユーラシア北部、極東アジアに関してはロシアの地図を参考としているケースが多い。トルストイが自国の権威ある地図ではなく、遠い海外の情報源が確かでない地図を参考にしたと考えるのは不自然ではないだろうか。

## まとめ

以上トルストイと日本地図のつながりを、フョードル・トルストイを仲介者として考察した。直接の証拠は見当たらなかったが、現時点ではトルストイはクルゼンシュテルンの地図を直接参考としたか、あるいはクルゼンシュテルンの調査した結果に基づいた何らかの地図を参考としたと考えられる。この点は従来の研究では問題視されず、言及されなかった。ロシア側の研究からすれば、このトルストイの日本地図は、作家の手遊びにすぎないであろう。

これは、トルストイが一瞬日本に対して興味を示した、ということに留まらない。日本、特に北海道以北、サハリンは世界地図上の未知なる部分であった。今日我々が視覚

<sup>22)</sup> 1853年のこの時期の日記の中に、「2時間アトラスで勉強した」とあり、さらには「バタヴィアは130°であり・・・」というジャワ島バタヴィアの記述がある。

<sup>23)</sup> 前掲のウェブサイト「蘆田文庫特別展」所収。

的に捉える世界地図というものが、当時は未完成であった。これは世界観、世界理解の問題である。日本はトルストイにとって、視覚的に捉えられない世界観の余白であった。1850年代初頭のカフカスにおいて、トルストイはその世界観の余白部分を埋めるべく、日本地図を書き写した。これ自体は些細な出来事である。些細な出来事であるが、1853年の日本地図と、作家の晩年の日本とのつながりを無関係とすることはできない。トルストイの日本への関心は、1890年代以降土地問題や非戦論を焦点としつつ、日露戦争において大きなものへと発展したのである。

### 参考文献

- А.И. Герцен. «Былое и думы». Москва, 1983.
- В.М. Головин. «Записки флота капитана Головина о приключениях его в плену у японцев в 1811,12 и 13 годах». СПб., 1816.
- В.М. Пасецкий. «Иван Фёдорович Крузенштерн». Москва, 1974.
- И.Ф. Крузенштерн. «Путешествие вокруг света в 1803,4,5,и 1806 годах. По повелению его императорского величества Александра Первого». Часть первая, СПб. 1809.
- С.Л. Толстой. «Фёдор Толстой Американец». Москва,1926.
- Д.И. Фонвизин, А.С. Грибоедов. «Пьессы». Москва, 2001.
- П.А. Вяземский. Сочинения в двух томах. Москва, 1982.
- 秋岡武次郎、『日本地図史』、河出書房、1955。
- 大槻玄沢、志村弘強編、杉本つとむ他解説、『環海異聞 本文と研究』、八坂書房、1986。
- 黒田日出夫、メアリ・エリザベス・ベリー・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』、東京大学出版会、2001。
- 小林忠雄編訳、『ラベルズ世界周航記 日本近海編』、白水社、1988。
- 呉秀三、『シーボルト先生、其生涯及功業』、一卷、平凡社、1967。
- フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、『日本』、中井晶夫訳、雄松堂書店、第一巻、1977。
- 保田孝一編、『文久元年の対露外交とシーボルト』、岡山大学 吉備洋学資料研究会、1995。
- 保柳陸美編、『伊能忠敬の科学的業績』、古今書院、1974。
- William Robert Broughton, "A voyage of discovery to the North Pacific Ocean", New York, 1967.
- Gerhard F. M, "Voyages from Asia to America", New York, 1967.

転写した地図の出典

- 図2 フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、『日本』、中井晶夫訳、雄松堂書店、図録第一巻、1997。
- 図3 小林忠雄編訳、『ラベルーズ世界周航記 日本近海編』、白水社、1988。
- 図4 Adam J. von Krusenstern, Atlas of the voyage round the world. New York, 197?。  
(出版年不明、オリジナルは1813年にペテルブルグで出版された。)

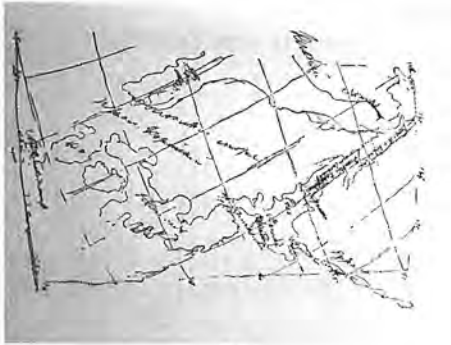


図1

1853年10月、トルストイによる手書の日本地図。全体として正確とは言えないが、一応北海道がそれと分かる形をしている。

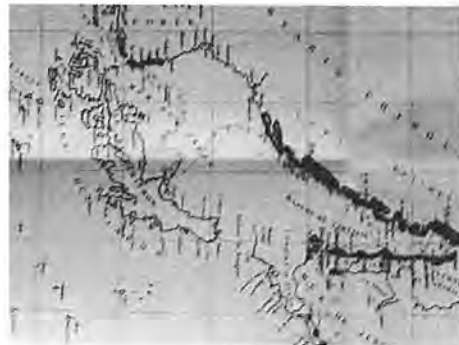


図3

ラベルーズによる日本地図。北海道の東半分が測量されている。



図2

シーボルト『日本』からの転写。この図は伊能図を高橋景保が編集してシーボルトに渡したと考えられる。



図4

クルゼンシュテルンによる北太平洋図。クルゼンシュテルンは樺太を半島だと誤解したが、これは後に訂正される。